

# 13世紀末のシトー会レ・シャトリエ修道院に おけるジェロー・ド・サルの記憶

La mémoire de Géraud de Salles dans l'abbaye cistercienne  
des Châtelliers à la fin du XIII<sup>e</sup> siècle

北 館 佳 史

## 要 旨

本稿では13世紀末にシトー会レ・シャトリエ修道院で作成された『サルの聖ジェロー伝』を分析の対象として共同体が創建者をどのように記憶し、その記憶がどのような機能を担ったのかを検討する。院長トマは聖ジェロー崇敬を振興する事業を行ったが、その一環として聖人伝は作成された。伝記では改革者・創建者としてのジェローと地域の治癒者・聖域の保護者としてのジェローという二つの像が描かれ、聖人の墓を守る共同体・巡礼を集める聖域として修道院は再定義された。また、ジェロー派の過去とシトー会修道院の現代をつなぎ、共同体の同一性を保証する役割が聖人の身体に与えられた。ロベール・ダルブリッセルやクレルヴォーのベルナルといった普遍的な人物も修道院の在地的な記憶に歪曲されて取り込まれた。このように修道院のアイデンティティの再編の契機となった聖ジェロー崇敬はシトー会修道院と地域社会の霊的關係という点で先駆的な試みと捉えられる。

## キーワード

聖人崇敬, シトー会, 聖人伝, 隠修士, ジェロー・ド・サル

## はじめに

12世紀のシトー修道会の急激な発展に関して、母修道院から院長と修道士が派遣され、無から娘修道院が創建されるという新設モデルだけではな

く、既存の様々な共同体を修道会の組織に組み込む編入モデルの重要性も近年では注目されている<sup>1)</sup>。実際、11世紀に隆盛した南西フランスの隠修士の活動は12世紀には共住修道制の枠組の中に統合されたが、その多くを吸収したのがシトー会であった<sup>2)</sup>。特に西フランスにおいては本稿で取り上げる隠修士で遍歴説教師のジェロー・ド・サルが遺した多数の共同体を編入することでシトー会は勢力を拡大した。

編入された共同体は多かれ少なかれ以前からの慣習を残し、自身の異なる来歴を意識し、修道会の制度との調整をする必要があった。そうした過程については記録されにくいだが、共同体の創建者を記念する聖者伝史料に痕跡が残されることがある。例えば、グレロワは編入されたオバジヌ修道院の内部対立や修道会への抵抗の痕跡を『オバジヌの聖エティエンヌ伝』に読み取った<sup>3)</sup>。本稿で取り上げる『サルの聖ジェロー伝』は既にこうした統合の葛藤から遠く隔たった13世紀末にレ・シャトリエ修道院で作成されたものであるが、創建者の聖性と功德の宣伝を通じて修道院共同体のアイデンティティを再編する試みとして捉えることができる。

シトー会は当初は修道生活の混乱への恐れから聖人崇敬に対しては消極的な態度を示していたが、13世紀には態度を変化させ、修道会の内外の聖人の聖者伝史料の作成を活発化し、また、会として聖人の列聖を積極的に推進するようになった<sup>4)</sup>。さらに、13世紀半ば頃からは修道院外に崇敬を広め、巡礼地に成長する修道院も出現し始めた。例えば、ポンティニー修道院は1246年に列聖された聖エドマンドの崇敬で、フランス王国のみならずイングランド王国からも多数の巡礼を集めた<sup>5)</sup>。隠修制の過去を持つ代表的なシトー会修道院で創建者崇敬の高まりが見られるのもやはりこの頃からである。1243年に院長レキシントンのスティーヴンの下でサヴィニー修道院では新聖堂に創建者ヴィタルのほか修道院の聖人たちの遺体が大大小小的に移葬され、列聖のために多くの聖者伝史料が作成された<sup>6)</sup>。また、前

述したオバジヌ修道院においては1250年頃に創建者エティエンヌの豪華な墓が制作されたが、この際、聖人の遺体の移葬が執り行われ、巡礼を集めたと言われる<sup>7)</sup>。本稿で考察の対象とするレ・シャトリエ修道院で13世紀後半に院長トマがジェロー・ド・サルの崇敬のために推進した事業も、このようなシトー会における世俗の宗教性との関わりをめぐる新たな動きを示す事例の一つとして位置づけられる。

ジェローの伝記的研究において画期となるのは20世紀初頭のヴァルターの遍歴説教師に関する研究であり、現在でも参照すべき精緻な史料分析が行われた<sup>8)</sup>。一方、現在、最も参照されているのは1978年のラングレの伝記的な研究である。そこでは証書や年代記などの史料とともにジェロー伝が検討され、史料の構造の分析や後世による加筆修正の問題が扱われた<sup>9)</sup>。その後、ベルティエはラングレの研究に依拠しつつジェロー派の修道院の発展とシトー会への編入を跡付けた<sup>10)</sup>。ジェロー派の個々の修道院についても研究は進んでいるが、編入時期について再考を促すグレロワのカドゥアン修道院に関する論文が示唆的である<sup>11)</sup>。レ・シャトリエについては多くの文献史料が失われてしまったこともあり、これまで主に考古学と建築史の視角から研究がなされてきた。中でも、13世紀後半の聖ジェロー崇敬の振興を建築史的な側面から検討しているアンドロー・シュミットが、聖堂の改築に関する史料として伝記を使用している<sup>12)</sup>。

ジェロー伝の研究は聖人の生涯と霊性の実像に迫ることを目的に進められ、伝記の中で信頼性の高い部分と著者の誤りや創作による不正確な部分を明らかにした。本稿ではこれを踏まえて、13世紀後半にレ・シャトリエ修道院でいかにジェロー像が創られたのかという点を問題にする。この時期に創建者の崇敬を振興する事業の柱の一つとして聖人伝は作成され、聖人の記憶が再編されたが、これは崇敬の場として修道院が自らを再定義する作業と関連していると考えられる。本稿では、主としてジェロー伝を考

察対象とし、そこに描かれたジェロー像を検討し、さらに聖人崇敬のあり方を検討することで創建者がいかに共同体において記憶され、その記憶がどのような機能を担っているのかを探っていきたい。

## 1 史料について

第1章では主要な史料の説明をした後に、ジェロー伝の枠組について考察したい。レ・シャトリエ修道院に関する史料は、1805年のドゥー・セーヴルの文書館の火災によりオリジナルの文書のほとんどが失われ、証書の写しを集めたカルチュレールも焼失してしまった。デュヴァルは近代に筆写された文書と各地に分散していたオリジナル文書を収集し、レ・シャトリエの証書集を刊行した<sup>13)</sup>。この証書集で刊行された12世紀、13世紀の文書は計113通に留まり、特に初期については史料が欠如している。

ジェローに関する史料としては、ジェローが創建した修道院のカルチュレールが同時代の証言として貴重である。カドゥアン、ダロン、グランセルヴ、ラブシ、ボンリユーの5つの修道院のカルチュレールに写された文書は、1115年から1120年の最期の5年のジェローの足跡について比較的正確な年と場所の情報を提供する。もう一つの情報源のサン・メクサン年代記は、より広い視点からジェローの活動に言及する同時代史料であり、創建した15の修道院のリストが含まれている<sup>14)</sup>。

ジェロー・ド・サルについての主要な情報源は何よりも13世紀末にポワトゥ地方のレ・シャトリエの匿名の修道士が作成した『サルの聖ジェロー伝』である。13世紀後半に院長トマの下で作成が開始され、1277年以降に完成された。このテキストはモーリストのマルテヌによって刊行され、ボランディストによって再刊された<sup>15)</sup>。この刊本の底本となったレ・シャトリエにあった手稿は散逸した。また、18世紀には修道院に別の手稿が存在したが、フォントゥノの筆写だけが残されている<sup>16)</sup>。さらに、母修道院

であるクレルヴォーに写本が存在していたが、現存していない。

伝記の作成過程についての記述はなく、どのような情報源に基づいて伝記を作成したのかを推定する必要がある。聖人の生涯に関する前半部分は事実の誤りが非常に多く、後半のレ・シャトリエ修道院の歴史に関しては比較的正確な内容である。隠修士が死亡した年とその聖人伝が作成された年までの期間を聖人同士で比較した場合、ジェローが最長であり、死後150年以上後に作成された<sup>17)</sup>。したがって、証人はもちろん存在せず、古い文書と伝承に基づいて書かれた。さらに、伝記の著者はあるべき像に事実を合わせ、年代の順序を無視する傾向があり、特に前半部分については信頼できない話が多い。

伝記の著者は自ら古い文書に依拠していることを認めているが、例えば、伝記の18節はジェローの死者の巻物を写した部分である。これは修道院間で伝達されたジェローの死亡通知であり、「ポワティエ司教と隠修士の院長たちの証言」と呼ばれ、1120年から1123年の間に作成された同時代の史料である。ジェローの弟でポワティエ司教のグリモーの死について書いた15節も死者の巻物などの記録を参照しており、信頼度の高い情報を含んでいる<sup>18)</sup>。さらに、レ・シャトリエの創建や聖堂の建設などの正確な記述は明らかに修道院の証書を参照している。

次に、ジェロー伝の時間的枠組に注目すると、著者にとっての過去と現代(1248年以降)に二分することができる。この場合、1節から31節が過去で、32節から44節が現代に相当する。この伝記は修道院創建とその後の時代から院長トマの時代まで100年以上の飛躍がある点に特徴がある。「しかし、昔の人が書いたことは省略し、私たちの時代に戻ろう」という文で一挙に時代を移動し<sup>19)</sup>、この間に起こった重要な出来事については全く触れられない。この非連続性がジェロー伝の時間的な構造を規定している。

空間的な枠組について考察すると、実際のジェローの活動はペリゴール

からトゥルーザン、リムーザン、ポワトゥへと大きく展開するが、伝記の記述はペリゴールとポワトゥに限定されている。著者はジェローの出身地のペリゴール地方を蔑視し、「この頑迷で戦乱の多い荒々しい地方」と呼び、聖人はこの強情な土地の影響を受けなかったと述べている<sup>20)</sup>。一方、伝記の後半はレ・シャトリエ周辺のポワトゥ地方に視点が固定される。このように実際のジェローの活動の広域性とは対照的に伝記の視点は局地的である。

最後に制度的な枠組に関しては、まず、ポワティエ司教座中心の視点であることが指摘できる。伝記の中にピエール2世、ギヨーム・ジルベール、ギヨーム2世、グリモー、シャロンと5人のポワティエ司教を確認できる一方、ジェローの活動に協力した他の司教座の司教への言及は皆無である。修道会の中ではこの地域で強いフロントブロー会との関係が重視され、女子修道院の創建への関与や修道院での説教といった活動が描かれる。レ・シャトリエが属するシトー会については、母修道院のクレルヴォーと娘修道院のポショとの関係が重視されている。ジェローは多くの隠修士の共同体を創建・組織化したが、死後は分裂し、これらのほとんどが最終的にシトー会に加盟した。伝記ではこの旧ジェロー派の修道院のカドウアンとグランセルヴが登場する。特徴的なのは伝記において諸侯や世俗領主への言及が皆無であることであり、リュジニャン家やロシュフォル家といった修道院の創建者や支援者は名前すら記載されていない。

このように伝記は著者の関心から集められた断片的な話から成り、時間的にも空間的にも制度的にも偏りが見られる。そして著者は普遍的というよりも在地的な関心に導かれてどのような話を使用するのかを決めていたことが窺える。

## 2 ジェローの肖像と修道院の位置づけ

伝記の前半部は生前のジェローの生涯を扱っているが、伝記の著者からは既に遠い過去の出来事であり、古い文書と不確かな伝承と大胆な想像力に基づいて描かれる像はしばしば歪んでいる。この点は先行研究で指摘されてきたが、その意味の解釈はまだ十分になされていない。ジェローをいかに描くかということは、創建者を通じて現在の修道院をいかに捉えるかということにも通じている。第2章では伝記に描かれるジェローの様々な像を検討し、そこから修道院が自身をどう位置付けているのかについて検討する。

### 2-1 改革者・救助者

伝記の中で生前のジェローの実像について最も重要な情報は18節に写された死者の巻物の記述である。死後間もなく書かれたこのポワティエ司教と隠修士の院長たちの証言の中で、共住生活から荒れ野の生活へ入り、隠修士として禁欲的な生活を送り、説教師として精力的に活動し、最後は多くの修道院を創建者したと簡潔に生涯の事績がまとめられている。それによれば、荒れ野の隠修士として苦行衣をまとい、食事は水と豆で一日に一度しかとらず、ヒラリオンやアントニオスの姿のようであり、キリストが彼において生きていた。説教師としては「荒れ野にあってはヨハネ、民衆にあってはパウロのように行い、語」り、大勢の人間を荒れ野に呼び寄せ、回心させた。創建者としては多くの修道院を建て、「聖ベネディクト戒律を一字一句に至るまで遵守するように定めた」。そして「彼はキリストを愛し、キリストを説き、キリストを模倣し、キリストへと昇りつめた」とジェローのキリスト中心の霊性が強調される<sup>21)</sup>。

ポワティエ司教ギヨーム・ジルバール（1117-23）の下で弟子たちから話

を聞いて書かれたこの「証言」に描かれるのは死の直後にポワティエ司教周辺の視点から見られたジェロー像であるが、ジェロー伝の12節までの伝記的記述の部分はこの証言をモデルにして書かれている。ラングレは伝記の7節と11節と証言の字句を比較し、同一の表現が用いられていることを指摘した<sup>22)</sup>。また、両者に共通の要素としては説教者としての洗礼者聖ヨハネやベネディクト戒律の文字通りの遵守への言及が見られる。伝記的記述の部分は決まり文句が非常に多く、具体的な情報に乏しいことも証言に基づいていることの証左である。付加された要素としてはマグダラのマリアのような冥想者としての像があり、キリスト中心的な靈性はむしろ強調されなくなっている。

西フランスの遍歴説教師の活動はグレゴリウス改革と連動して進展したが、アンリエはベルナルド・ド・ティロンの伝記について教会全体の改革のヴィジョンが欠落していると評価した<sup>23)</sup>。ジェローの伝記についても同様であり、普遍教会や聖職者の改革について言及がなく、改革とは個人や集団の心や生活の改革を意味している。ジェローは炎のような言葉で人々を回心させ、荒れ野に人々を引き寄せ、多くの共同体を形成することに卓越した能力を発揮した人物として描かれる。また、特徴的なのは女性の回心の話であり、サン・メクサンの娼婦の誘惑を斥け、回心させてフォントブロー修道院に入れたり、フォントブロー修道院で説教をして修道女の華美な髪型や髪飾りを正したりしたとされる。

生前のジェローについて伝記は危難の救助者というもう一つの像を示している。生前奇跡は4例が確認できるが、例えば、兄弟のグリモーとフルクの渡河を助ける話(13節)、モン・サン・ミシエルのジェローの弟子が嵐で海に落ち、師が出現すると直ぐに海岸に打ち上げられる話(19節)、村の火災でジェローの活動の支援者の家が脅かされるが、聖人に呼びかけると家が火災を免れる話(20節)がある。このように伝記的部分の後半で生前



奇跡の話が語られるが、聖人と直接に関係のある人物の危難の救助の奇跡が中心である。

## 2-2 歪んだジェロー像

死後久しく時を経て伝承が不確かであるのに加え、著者は都合に合わせて話を創作する傾向があり、ジェロー像は大きく歪曲している。ポワティエ司教らの証言にない要素として、まず、ジェローが高名な遍歴説教師のロベール・ダルブリッセルの弟子として描かれる点がある。少年ジェローが老人のロベールに会いに行き（3節）、師の教えを受け、その勧めで参事会員になり（4節）、師の許可を得て荒野へ出かける（5節）。さらにロベールとともにテysonとブボンの女子修道院を創建し（12節）、ジェローの死の床にロベールが出現する（25節）。人生の節目節目においてロベールはジェローを導く存在として姿を現し、「彼の師（magistrum suum）」「彼の指導者（eius praeceptor）」「我が教師（eruditor meus）」などと呼ばれる<sup>24)</sup>。このように伝記では年の離れた密接な師弟関係として描かれるが、二人は同年代であり、二人が出会うのは晩年になってからである<sup>25)</sup>。カドゥアンの創立に関する証書はロベール・ダルブリッセルとジェローの関係を伝える貴重な史料である。1115年7月11日にロベールはジェローにカドゥアンの森に所有するすべてを譲渡したが、ここでロベールはジェローを「尊敬すべき師、私の仲間、近しい者の中でも親友」と呼んでおり、ここから二人は年の近い説教師仲間であったことが窺える<sup>26)</sup>。それゆえ、伝記に描かれる二人の師弟関係は著者の創作であるが、問題はこうした記述の動機である。13世紀には西フランスの隠修士としてはヴィタル・ド・サヴィニー、ロベール・ダルブリッセル、ベルナルド・ド・ティロン、ラウル・ド・ラ・フュテの四人が伝説化した存在であり<sup>27)</sup>、ジェローは限られた範囲以外では忘れられた存在であった。伝記においても聖人の墓を制作する職人がジェ

ローのことを知らないと言って懲罰を受ける話がある（34節）。聖人の崇敬を振興し、巡礼を集めるためには知名度に劣るジェローの存在を広く知らしめる必要があった。それゆえ、実際に親交のあった高名な隠修士との関係を強調して、その弟子にすることでジェローを権威づける効果を期待したと考えられる。

さらに、師弟という設定だけでなく、ロベールとのつながりは伝記の随所で強調される。12節ではジェローの創建した9の修道院が列挙されるが、そこにトゥソンとブボンという女子修道院が含まれる。ロベールとともにジェローはトゥソンを創建し、そこを修道会全体の頭とし、フォントプローもその娘修道院であったと伝記の著者は主張する（これは年代的に成り立たない）。また、ブボンについては貧しさが気に入り、創建者としてたびたび祝日に説教のために訪問したとされる。しかし、ロベールとの協力や関与があったとしても、両者ともフォントプロー会の修道院であり、ジェローはその創建者ではない<sup>28)</sup>。ヴァルターによれば、17節のジェローがフォントプローで説教をし、修道女の髪型や髪飾りの乱れを正し、その結果、頭髮の規則が定められたという話も規則の存在から遡及されて創られた話である<sup>29)</sup>。このように伝記の著者にはロベールやフォントプロー会とのつながりとジェローの影響力を強調するために話を歪曲・創作する傾向が見られるのである。

伝記の著者が付加した事実とは異なる第二の要素は、戒律を遵守する律修参事会員としてのジェローという像である。4節でロベールの助言で少年ジェローは家から近くにあるサン・タヴィの律修参事会員となり、5節で参事会員としての生活が記述される。そこでは敬意と謙遜をもって模範的に行動し、「聖アウグスティヌス戒律を一字一句もないがしろにしな」かったとされる<sup>30)</sup>。しかし、グレゴリウス改革の影響を受けてサン・タヴィの律修改革がなされるのはトゥールーズのサン・セルナン教会に所属した

1081年以降の話であり、ジェローがいた1070年代には在俗参事会であった<sup>31)</sup>。それゆえ、戒律を遵守する参事会員という像はジェローの経歴の正統性を主張するための著者による創作である。

こうした記述は戒律に従った共住生活を送った後に隠修士として活動をしなければならないという伝統的な修道制の要請を意識したものであろう<sup>32)</sup>。さらに、晩年に自身が創建した修道院で聖ベネディクト戒律を文字通りに遵守させたという話を少年時代に遡及させたものと考えられる。なおこの聖ベネディクト戒律の遵守という点についても、1117年にグランセルヴが「シトー派の仕方で聖ベネディクト戒律を遵守」する条件で司教の承認を得たのを皮切りに徐々に広まるが<sup>33)</sup>、一律ではなく、ジェローの死の時点で戒律を採用していない共同体も存在したことに留意する必要がある。この点については同時代のポワティエ司教らの「証言」の時点で既に隠修士の共住修道制の枠組への統合を称賛するために誇張されているのである。

第三に、伝記の著者は、年代的にありえないが、ジェローをクレルヴォーのベルナルの友人として描いている。21節と22節でベルナルの全教会における名声を讃えた後に、南西フランスの旅行の話をしているが、この時に二人は出会い、以後は「キリストにおけるひとつの心、ひとつの魂となった」とされる<sup>34)</sup>。二人の友情は鉄と鋼、また契約の箱の上の二体の智天使にも例えられる。続いてジェローが創建した修道院のシトー会への編入に関する話になり、二人がカドゥアンを訪問した時には拒まれ、グランセルヴでは歓迎され、後者のシトー会への編入が実現したと語られる。しかし、伝記が主張するように二人が出会った可能性はなく、この話はジェローの死の25年後の1145年のベルナルの対異端説教旅行を基にした創作であり、実際、この時にグランセルヴはシトー会のクレルヴォー系列に編入された。

伝記ではシトー会の慣習の新しさや衣服と食事の清貧を嫌ってベルナルを不名誉に追い返したとして、カドゥアンの修道士たちは「ベリアルの子 (fili Belial)」や「エピキュリアン (epicuricis)」と強い言葉で貶されている。カドゥアンは1119年にはポンティニー修道院から来た院長を受け入れ、シトー派の慣習を受け入れたが、正式には加盟せずに自ら修道院の連合体を形成し、インノケンティウス3世の圧力の下で抵抗の末に1201年にポンティニーの系列に編入された。伝記ではこの遅い編入について「その後、ポンティニーの下で回心した時のように、夜明けの太陽はカドゥアンの者たちをまだ訪れなかったのである」と言及している。以上の記述からは、同じ旧ジェロー派の有力修道院に対する伝記の著者の強いライバル意識が窺えるが、これは聖ジェローの墓を守るレ・シャトリエ修道院に特有の意識であるだろう。また、同じ系列のグランセルヴと対比しているところにクレルヴォーの系列意識が表出していると思えることができるだろう。

### 2-3 修道院の位置づけ

レ・シャトリエ修道院の編入は伝統的に1163年とされてきたが、グレロワはこれを批判し、13世紀初頭でカドゥアンと同じ頃と推測した<sup>35)</sup>。現状ではいつの時期かを示す決定的な史料は存在しないが、院長間の上席権を定めるために作成された修道院リストの編入年は信頼できない場合が多いため1163年ではない可能性は十分にある。いずれにせよ、シトー会に編入されるまでのジェロー派修道院の時期はかなり長く、独自の慣習を維持していた。伝来する12世紀の文書は合わせて10通に過ぎず、その実態に迫るのは困難であるが、比較的外部に開かれたあり方をしていただようである。例えば、1161年の枢機卿で教皇特使のギヨームの確認文書からは修道院が複数の教会を所有し、司牧活動に関わっていた可能性があることが分かる<sup>36)</sup>。また、1178年の教皇アレクサンデル3世の文書で修道院への俗人の

自由な埋葬権を承認されている点もこの時期のシトー会の規則とは異なる実践を想定させる<sup>37)</sup>。さらに、領主との紛争解決文書で所領を荒らした領主が改悛をする場所に修道院の集会室が好んで用いられ、見返りに修道院側から靈的恩恵や祈祷盟約が与えられるなど領主世界との距離の近さにも特徴がある<sup>38)</sup>。一方、シトー会的な制度とみなされる助修士の初出は1206年、グランギアの初出は1218年のことである<sup>39)</sup>。13世紀にシトー会内部の多様性も増大する中で、その後、統合がどこまで行われたのかは検討の余地がある。

このような曖昧さを抱えた修道院が自らをどう位置づけているのかを考察する上で、1131年にクレルヴォーのベルナルが修道院を訪問したという伝説が注目される。アナクレトゥスのシスマの際にインノケンティウス2世を支持するベルナルがアキテーヌ公ギヨーム10世と会談し、公のアナクレトゥス支持を放棄させた話は有名であるが、その会談が他ならぬレ・シャトリエで行われたというのである。これは史料的に根拠のない話であるが、広く信じられ、記念碑的なシトー修道会史を書いたマンリケは1131年に既にレ・シャトリエがシトー会に加盟していたという説の根拠にした。修道院の宿舎の東側の部屋は「聖ベルナルの間」と呼ばれ、18世紀には修道院の食堂にはこの主題に関する18世紀の画家の2枚の歴史画が飾られていた<sup>40)</sup>。

この修道院訪問の話と上述したジェローとの友情の話の二つのベルナルの伝説は、編入以前の古い時代からのシトー会あるいはクレルヴォーとのつながりを強調したいという動機によるものであると考えられる。ここではレ・シャトリエ修道院の旧ジェロー派とシトー会という二つのアイデンティティが問題となっており、二人の「父」の友情はこの統合を象徴する話として捉えることができるだろう。こうしてベルナルという修道会を代表する人物が、修道院の在地的な記憶の中に奇妙な形で取り込まれる

ことになったのである。

伝記の最後の44節は著者にとっての「現代」のシトー会への修道院の帰属を確認する話で締めくくられている。母修道院のクレルヴォーから院長の代理でポワトゥ地方の娘修道院の巡察に来た修士ギヨーム・フィガスが道中に夜の火の消し忘れて火傷を負うが、レ・シャトリエの聖人の廟を参詣すると奇跡的に治癒したという話である。クレルヴォーとの親子関係の絆を示す話を最後に配置し、現在の修道院の制度的な位置を確認しているのである。

伝記ではレ・シャトリエの唯一の娘修道院であるボシヨ修道院との関係も重視されている。ペリゴール地方に位置するボシヨはジェローの指導する共同体の一つであったと考えられる。ジェローの死後にこの地域の旧ジェロー派はカドゥアンを中心にまとまるが、ボシヨは遠隔のレ・シャトリエに接近し、その後、シトー会に加盟し、クレルヴォーの系列下でレ・シャトリエの娘修道院となった<sup>41)</sup>。ジェローの末弟のフルクはボシヨの最初の隠修士となり、聖なる生活を送り、死後は集会室に埋葬され、後に聖人として教会に移葬され、その聖遺物が人々から求められたと言われる(16節)。また、ボシヨの初代院長のジャン・ド・カレンシオがジェローの埋葬の祝日の記念に訪れ、自身の修道院に戻ることを拒み、留まらせるように祈願すると発熱に襲われ、3日後に死去し、集会室に埋葬された(31節)。こうした兄弟のそれぞれの墓所としての縁やレ・シャトリエで死ぬことの功德の話は、二つの共同体の初期からの霊的な強い結びつきを示している。1274年の総会決議から、この時期に両修道院間では紛争が生じていたことが分かるが、このように伝記には後の親子関係を基礎づける話が収められている。

既に述べたように伝記は修道院創建の時代から院長トマの時代まで100年以上を一挙に飛躍する時間構成であり、シトー会への編入については完全

に沈黙しており、例えば、シルヴァネス修道院の創立史のように修道会への加盟の過程を詳述して正当化する努力は放棄している<sup>42)</sup>。編入の時期からも隔たった13世紀末には既にシトー会修道院であることは、改めて歴史的に正当化する必要はないほど自明であったのかもしれない。しかし、ここで注意すべきは、伝記において統合されないまま並立するこの二つの時代をつなぐ役割がジェローの身体に与えられている点である。ジェローは石棺に納められ、128年間、院長トマの時代まで眠ったと語られた後、「現代」へと時間移動し、遺骸の奉挙の場面に接続する記述にそれは表れている。このようにレ・シャトリエは何よりもジェローが眠る修道院であり、二つの時代の共同体の同一性を保証する役割を聖人の身体が担っているのである。

### 3 聖域の形成

伝記の後半部はジェローの死後のレ・シャトリエ修道院の歴史を内容とし、特に13世紀後半の院長トマの治世の出来事に焦点が当てられている。奇跡物語が中心であるためにジェローの伝記的研究において必ずしも重視されてこなかったが、著者にとっての「現代」を描くこの部分は伝記の性格を理解する上で枢要な意味を持つと言える。実際、ジェロー伝はレ・シャトリエの聖域化の計画が生み出したものであり、伝記の作成はこの事業の重要な柱であった。第3章では院長トマの事業を通じて聖域がいかに形成されたのかを検討し、伝記において死後のジェローがどのように描かれているのかを検討する。

#### 3-1 院長トマの崇敬事業

13世紀後半に院長トマはレ・シャトリエ修道院を聖ジェローの聖域として大規模に再編成し、崇敬を振興する事業を推進した。伝記によれば、1248

年の聖母マリアの清めの祝日にトマが院長に就任すると直ちに「人々を教化するために、レ・シャトリエの聖域の人と場所を拡充し、ジェローの身体を高く奉挙すること、この二点において神の崇拜を促進すること」を計画し、翌年の復活祭の頃にジェローの遺骨を掘り起こし、洗浄し、棺に納めた<sup>43)</sup>。アンドロー・シュミットは院長トマの「メディア作戦」の柱として聖人伝の作成、墓の制作、聖遺物容器の制作、聖堂の改築の四つを挙げているが<sup>44)</sup>、これに典礼と行列も加えることができるだろう。

聖人の墓については伝記で詳述されている。まず、ジェローは他の兄弟と同じように埋葬し、墓の見守りもつけないように遺言して1120年に死去し(26節)、群衆が殺到する中で旧シャトリエの聖母マリアの礼拝堂の祭壇の左側に埋葬された(27節)。翌年には修道院の移転に伴い新シャトリエに移葬され、瀝青の塗られた石棺に納められた。1129年にはこの遺体の周囲に石造りの教会の建設が開始され、聖堂の祭壇の左側の大理石の墓石の下に瀝青が塗られ、封がされた石棺が納められていた(32節)。この頃から毎年、埋葬日を記念して近隣の院長たちが集まる習慣となり、修道院の地域的なネットワークで記念が行われていた(31節)<sup>45)</sup>。1249年の院長トマによる奉挙の際には新たに6本の石柱に支えられる箱型の大理石の墓が制作されたが、これは同時代のオバジーヌのエティエンヌの墓に類似した形状の墓である(33節)<sup>46)</sup>。墓の位置は祭壇の左側の大理石の敷石の上に置かれていたが、より東側の聖域の中心の座を占めるように主祭壇の後ろに移され、この墓の周囲で様々な奇跡が頻発したとされる(36節)<sup>47)</sup>。

聖人の身体はこの墓に安置する一方で聖人の頭部は金メッキした聖遺物容器を制作させ、これに納めた<sup>48)</sup>。この聖遺物容器についてはフォントゥノのデッサンが残されているが、金銀線細工の施された足の部分に支えられた中央の円筒形の部分には聖ジェローと三人の天使の像が描かれている<sup>49)</sup>。この容器は主祭壇に設置されていたが、革命の際に消失した。また、



肋骨を入れる小さな聖遺物容器も存在し、巡礼たちに展示された。

このような聖遺物の容れ物を置く聖人の廟を建てることを目的として院長トマは修道院の聖堂を大規模に改築させた。建築家のコラン・ド・サルの指揮の下で聖人の墓を演出するために聖堂の後陣がゴシック様式で大幅に拡張され、身廊や交差廊と不釣り合いなほどの広さとなった。アンドロー・シュミットはこの角形の後陣をイングランドの様式に類似しているが、ポワトゥの地域的な様式の独自に発展したものだとし、さらに聖人の墓の構造との類似性を指摘した<sup>50)</sup>。工事はリジュニャン家やアルフォンス・ド・ポワティエの援助を受けて進められ<sup>51)</sup>、1277年に完了し、ボルドー大司教シモンにより聖別された。

こうして聖人の墓の周囲の聖域の整備が進められたが、修道院にはサン・ジェロー礼拝堂というもう一つの重要な聖なる場があった。これは旧シャトリエにあるジェローが死去し、最初に埋葬された礼拝堂であり、新シャトリエから1 kmほど離れたところにある。そこには火事で礼拝堂が燃え落ちた時にもジェローの功德により焼け残ったとされる聖人の木製のベッドがあり、この接触型の聖遺物が多くの巡礼を集め、奇跡の起こる舞台となった<sup>52)</sup>。重要な祝日にはこの礼拝堂に向けて聖遺物を伴った行列が行われ、その後にミサが執行された<sup>53)</sup>。肋骨の入った聖遺物容器は日曜にはこの礼拝堂に運ばれて、巡礼たちに展示されたが、聖遺物にキスをして礼拝堂で徹夜の祈りをする事で病が治癒されると信じられた。この場所が聖なる場とみなされ始めた時期は不明であるが、院長トマの事業に先立って俗人の巡礼の場となっていた可能性はある<sup>54)</sup>。いずれにせよ、このように二つの聖性の極を有しているのが、ジェローの聖域の特徴である。

聖堂内の聖人の墓に接近するために修道院の壁の破れ目から侵入しようとした女性がこの礼拝堂に案内された話はこの施設が担っていた役割を窺わせる。1257年に教皇庁の許可を得たと称する貴族女性が修道院に立ち入

るのを禁止する教勅をアレクサンデル4世から与えられ、修道院は女性の巡礼に対してアクセスの禁止を強化する措置をとった<sup>55)</sup>。伝記では女性の巡礼の言及は多くはないが、このように修道院が対応に苦慮するほどに集っていた。ところで女人禁制の強い修道院においてはしばしば修道院の壁沿いやその外に礼拝堂が設置され、女性の巡礼の崇敬の場となることが知られている<sup>56)</sup>。これらの事実を考慮すると、この時代にサン・ジェロー礼拝堂が女性の巡礼のための施設として機能していたことが推測されるのである。同じ頃にポンティニー修道院が女性の巡礼に対して部分的に立ち入りを認める措置をとっているのとは対照的であるが、レ・シャトリエでも後の時代には緩和され、女性向けの宿舎が修道院の壁の内側に置かれるようになった<sup>57)</sup>。

崇敬事業の規模の大きさやクレルヴォーが伝記の写本を所有しているところから、院長が正式な列聖を目標にしていた可能性もあるが、地域的に重要な聖人を生み出すことを目指したのであればそれは実現し、多くの巡礼を集めることには成功した。シトー会では共通の聖人を祝うが、院長トマは在位の初期の1254年の総会決議において聖メクサンと聖ラデゴンドの崇敬の許可を得ており<sup>58)</sup>、ポワトゥ地方の代表的な聖人の崇敬も修道院の典礼に統合することで地域に根を下ろした聖域の性格を強化した。

### 3-2 治癒者・聖域の保護者

ジェローは死後も修道院に現存し、共同体やその周辺世界の出来事に介入し続ける存在として描かれている。ジェロー伝の中には22例の聖人の死後奇跡を確認することできる。このうち治癒奇跡が12例で最も多く、聖人を讃える奇跡が4例、聖人の出現が3例、懲罰奇跡が2例、幻視が1例と続く。死後のジェローはまず治癒者とみなされ、その功德を人々から期待される存在であった。伝記の36節で1277年に改築の完了した聖堂で様々な

種類の治癒奇跡が生じたと述べられ、そこから最後の44節までに治癒奇跡の話が記録されている。治癒の内容としては狂気が3例、癲癇が2例、負傷が2例、蘇生が1例、火傷が1例、腫瘍が1例、熱病が1例、歩行困難が1例である。一般的に多い失明の例がなく、運動障害や腫瘍もそれぞれ1例に留まっており、あまり典型的でない症例の治癒が重視されている。中でもジェローは癲癇の治癒を「専門」としていたようであり、シャヴィニーのある家門では癲癇にならないように毎年贈り物を持って若者たちを参詣させていたと言われる(41節)。また、シャヴィニーの若い司祭も聖人が癲癇の悲惨から保護してくれるという噂を聞き、毎年聖人の墓を参詣し、礼拝堂で徹夜祈願をしたところ回復したとされる(43節)。特徴的なのは落下による負傷者の治癒の奇跡であり、例えば、靴屋の屋根を修理していて落下したピエールの致命的な負傷が聖人の功德のおかげで回復したとされる(37節)。

奇跡の受益者の出身地について情報がある例を検討すると、アルセー、サン・ジェネスト・ダンピエール、シャヴィニー、サン・メクサンなど修道院を中心とした半径50km圏の地域に分布している。修道院の周辺に住む女性が子供を連れてノートル・ダム・ド・セル、サン・チボーといった遠隔の聖地、さらにサン・メクサンを巡礼しても効果がなく諦めたところ、ある貧しい女性にすぐ近くの聖ジェローに行くように教えられた話は、近場の効験のある聖人として認知されることへの修道院側の期待を窺わせる(40節)。また、院長トマの使いの子供や姪の夫の知り合いといった縁故関係のある人々の例や毎週のように祈りに訪れる巡礼者たちの例などからも地域的な崇敬圏が想定される。このようにジェローには地域の病癒しの聖人としての役割が期待され、伝記でその効験が宣伝された。

この治癒者としての役割に加えて、死後のジェローに与えられたのは多くの巡礼を集める聖域の保護者としての役割である。このことを直接的に

述べているのは35節のジェローの出現の話である。レ・シャトリエの修士で貧者の歓待係の長であったギヨーム・デジュヴルは深夜に聖堂で見知らぬ修士に出会った。この際、出現したジェローは「私はあなたのために神の前で徹夜をし、我が聖域の人と場所を保護している」と述べ、自分が聖域の保護者の役割を果たしていることを告げた。また、自分の務めを果たすよう、残りの「修道院の面倒」は自分に任せるようにとも述べ、死後も修道院の問題で介入する用意があることを伝えている<sup>59)</sup>。

ジェローが聖域の保護者として振舞っている例としては、聖堂の改築作業の事故の救助の奇跡がある。例えば、1249年に院長トマが聖人の遺体を奉挙し、大理石の棺に安置した際に、蓋を吊り上げていたロープが1本を除いて切れてしまうが、誰も怪我をせず、重い蓋を少数の職人たちの手と肩で支えられたとされる(32節)。また、小さな鐘を設置するために修道院の鐘楼の上で作業をしていた大工のジャン・マルニャックが転落し、主祭壇の前の新しい床の上に叩きつけられたが、聖人の祈りと功德のおかげで死を免れたと言われる(37節)。このように聖域の工事を支援する例のほか、聖人が自分の聖遺物の窃盗を防ぐために介入する例がある。それによると、人々の前に展示された肋骨を入れた聖遺物容器を不注意に置いていたところ、客人の修士によって盗まれて大騒動になるが、結局、聖歌隊席に隠してあったのが発見された。この際に盗人は何度も修道院の外に肋骨を運び出そうと試みたが、ジェローの奇跡が邪魔をしてできなかったとされる(42節)。

伝記では聖人は自らの崇敬を支援するだけでなく、それを妨げる者を懲罰するために介入する存在としても描かれる。例えば、聖人の墓の制作が開始された際に、院長トマが毎日作業を急がせるために執拗に要求し、腹を立てた職人の一人が無礼な言葉で聖人を罵った。その夜、制作主任の下にジェローが出現し、侮辱に報いるために神が懲罰するだろうと予告し、

実際、間もなく冒涇者は病に罹って悲惨な死を迎えたとされる（34節）。また、近くのパルトゥネの人々がいつものように土曜日に徹夜の祈りに出かけた時に、ある者が巡礼の途上で他の巡礼者たちを侮辱し、聖人の功徳を貶めるような発言をしたために熱病に罹った。司祭を前に告白し、涙とともに恩恵を嘆願し、償いを約束し、首に縄をかけて聖人の墓を参詣し、死を免れたとされる（34節）。このように癒しの聖人像とは反対に自身の声望や功徳を疑う者に対して死に至る懲罰で報いる憤怒の相も見せている。

ところで死後も創建者が共同体のメンバーとして現存し、共同体を見守り、様々な出来事に介入をするという像はジェロー伝に限らず、修道院の創建者の聖人伝に一般的なものである。しかし、ジェローの介入は修道院の規律の維持や秘跡の正しい執行のためではなく、聖人崇敬の事業の支援や障害の除去のためになされるところに特徴がある。これは院長トマの時代の修道院側の功利的な関心によるものというよりもおそらくはジェローが助祭で隠修士のマギステルであって修道院長ではなかったことが関係しているであろう。

このようにして13世紀後半にレ・シャトリエが地域の聖域として再編される中でこの時代に生きる聖人として地域の治癒者および聖域の保護者としての役割がジェローに求められるようになった。

## おわりに

ここまでレ・シャトリエ修道院において創建者であるジェローがどのように記憶されたのかを検討してきた。伝記においては主として改革者・修道院の創建者としてのジェローの像と地域の治癒者・聖域の保護者としてのジェローの像の両者が描かれ、それぞれの時代に期待される役割を果たしていた。前者の権威づけのためにロバール・ダルブリッセルやバルナールのような有名人が動員された結果、伝記は複数の父たちの物語の様相を

呈し、時にジェローの存在が霞む印象を与えてしまっている。伝記は特異な時間的な構造を持ち、ジェロー派の共同体の過去とシトー会修道院の現代の間には大きな時間的な飛躍がある。この二つの時代をつなぎ、共同体に同一性を保証するのは創建者であるジェローの身体であり、伝記ではその容れ物や移動や配置が詳述されていた。このようにジェローの様々な像を描く作業を通じて、レ・シャトリエ修道院は聖人の墓を守る共同体として自らを再確認し、巡礼を集める聖人の聖域として自らを再定義した。また、伝記の中では母修道院や娘修道院との制度的な関係が物語的に基礎づけられ、再確認されていた。ジェローもロベールもベルナルも普遍性を有する存在であるが、このようにしてレ・シャトリエの在地的な記憶の中に取り込まれた。

院長トマによる崇敬事業においては、いわば総合的なメディア戦略がとられ、物理的に修道院空間が改造され、巡礼の出入りに合わせた運営・管理の仕方が整備された。聖人の墓を安置する聖堂とベッドを有する礼拝堂の二つの聖性の極を持つ聖域が形成され、修道院の周辺のポワトゥ地方を中心にする地域的な崇敬圏が成立した。ポワトゥ地方の代表的な聖人の崇敬も統合し、地域の聖域としての性格を強化していたことは、13世紀後半のシトー会の聖人崇敬と地域社会の関係のあり方の一つの興味深い例を提供している。中世末期に顕著になるこうした動きは地域の俗人の霊的な需要に応答しつつ新たに関係を取り結び、外部の宗教性を取り込んで共同体を活性化する先駆的な試みと捉えることができるだろう。

注

- 1) Berman, C.H., *The Cistercian Evolution: the Invention of a Monastic Order in Twelfth-Century Europe*, Philadelphia, 2000. バーマンの問題点については, McGuire, B.P., “Charity and Unanimity: The Invention of the Cistercian Order, A Review Article”, *Cîteaux: Commentari Cistercienses* 51, 2000, p. 292. フランスでの編入と女子修道院の役割については, Grélois, A., «L’expansion cistercienne en France: la part des affiliations et des moniales», Franz J. Felten & W. Rösener, eds, *Norm und Realität. Kontinuität und Wandel der Zisterzienser im Mittelalter* (Vita regularis 42), Berlin, Lit, 2009, pp. 292-307.
- 2) Barrière, B., «Les abbayes issues de l’érémisme», *Les Cisterciens de Languedoc (XIII<sup>e</sup>-XIV<sup>e</sup> siècles)*, Toulouse, 1986, pp. 72-105.
- 3) Grélois, A., «Les origines contre la réforme: nouvelles considérations sur la Vie de saint Étienne d’Obazine», *Écrire son histoire. Les communautés régulières face à leur passé*, Saint-Étienne, 2005, pp. 369-388. 拙稿「オバジヌの聖エティエンヌ伝試訳(一)」『中央大学文学部紀要史学』64号, 2019年, 77-99頁。
- 4) Vauchez, A., *La sainteté en Occident aux derniers siècles du Moyen Age (1198-1431)*, 3e édition, Rome, 2014, pp. 143-146.
- 5) 拙稿「13世紀半ばにおける奇跡の記録の形態 聖エドマンの奇跡関連史料をめぐって」中央大学人文科学研究所『人文研紀要』89号, 2018年, 333-358頁。
- 6) Bachelier, J., «Miracles et miraculés au milieu du XIII<sup>e</sup> siècle d’après le Livre des Saints de l’abbaye de Savigny», *Revue de l’Avranchin et du Pays de Granville* 88, fasc. 426, 2011, pp. 21-59.
- 7) Sparhubert, E., «Une image de la sainteté cistercienne: le tombeau français d’Étienne d’Obazine (vers 1250)», L. Ferran, ed., *Espace et territoire au Moyen age: hommages à Bernadette Barrière*, Bordeaux, 2012, pp. 173-190.
- 8) Walter, Johannes von, *Die ersten Wanderprediger Frankreichs. Studien zur Geschichte des Mönchtums*, II, Leipzig, 1906, pp. 105-118.
- 9) Lenglet, M.-O., «La biographie du Bienheureux Géraud de Sales», *Cîteaux Commentarii cistercienses* 29, 1978, pp. 7-40.
- 10) Berthier, M., «Géraud de Salles, ses fondations monastiques, leur évolution vers l’Ordre cistercien à la fin du XII<sup>e</sup> siècle», *Bulletin de la Société historique et archéologique du Périgord* 114, 1987, pp. 33-48.
- 11) Grélois, A., «Qu’avait Cadouin de cistercien au XII<sup>e</sup> siècle?», *Les manuscrits de l’abbaye de Cadouin*, Périgueux, 2015, pp. 4-21.

- 12) Andrault-Schmitt, C., «Les églises cisterciennes du Poitou. L'invention architecturale et l'émergence d'un réseau européen (1129-1277)», *Revue historique du Centre-Ouest* 1, 2002, pp. 11-103.
- 13) Duval, L., ed., *Cartulaire de l'abbaye royale de Notre-Dame des Châtelliers*, Clouzot, 1872.
- 14) Verdon, J., ed., *La chronique de Saint-Maixent (751-1140)*, Paris, 1979.
- 15) Martène, E., Durand, U., *Veterum scriptorum et monumentorum historicorum, dogmaticorum, moralium, amplissima collectio*, VI, Paris, 1729, col.984-1014; *Acta Sanctorum*, Octobris 10, Bruxelles, 1861, pp. 254-267. 両刊本では節の分け方が異なる。本稿では後者の刊本を参照する（以下、VGSと略記）。
- 16) Poitiers, Médiathèque Francois-Mitterrand, ms. Dom Fonteneau, t. LV, ff. 321-383.
- 17) Foulon, J.-H., «Les ermites dans l'ouest de la France: les sources, bilan et perspectives», *Ermîtes de France et d'Italie (XI<sup>e</sup>-XV<sup>e</sup> siècle)*, Rome, 2003, p. 86.
- 18) Lenglet, *op.cit.*, p. 16.
- 19) VGS, §31, p. 263C: “sed jam, omissis, quae scripsit antiquitas, ad nostra tempora veniendum”
- 20) VGS, §1, p. 254C: “in medio perversae nationis, bellicosae ac ferocis”
- 21) VGS, §18, p. 258D: “nunc Joannes in eremo, nunc Paulus in publico”, “normam Beati Benedicti usque ad minimum iota servandam ordinavit”, “Christum amavit, Christum praedicavit, Christum imitatus, ad Christum evolavit.”
- 22) ラングレは証言の筆者と同一人物が書いたとしているが同意できない。Lenglet, *op.cit.*, p. 22.
- 23) Henriot, P., «Les trois voies de la réforme dans l'hagiographie érémitique du XII<sup>e</sup> siècle. Enquête sur la Vita Bernardi Tironensis (BHL 1251)», *Médiévales* 62, printemps 2012, pp. 105-121.
- 24) VGS, §6, p. 255C, §12, p. 257B, §25, p. 261C.
- 25) Walter, *op.cit.*, p. 114.
- 26) Maubourguet, J.-M., ed., *Cartulaire de Cadouin*, Cahors, 1926, p. 9: “Geraldus de Salis venerabili magistro, socio meo, inter necessarios meos amicissimo”
- 27) 13世紀初頭のロベール・ドセールの年代記からこの四人が役割と地域を分担して指導したという伝説が生まれた。Foulon, *op.cit.*, pp. 106-107.
- 28) フォントブローは1101年、トゥソンは1112年にロベールによって創建された。Walter, *op.cit.*, p. 116.



- 29) *Ibid.*, p. 112.
- 30) VGS, §5, p. 255C: “non sanctae regulae Augustini iota vel apicem praeterire”
- 31) Lenglet, *op.cit.*, p. 22.
- 32) Leyser, H., *Hermits and the New Monasticism: A Study of Religious Communities in Western Europe, 1000-1150*, New York, 1984, pp. 12-17.
- 33) *Gallia Christiana*, t. XIII, *Instrumenta*, 15: “Regulam beati Benedicti teneant more cisterciensium qui laudabiliter eam custodiunt” 同様の語句はラブシ、ダロンの証書にも見られる。Lenglet, *op.cit.*, pp. 10-11.
- 34) VGS, §21, p. 260B: “facti sunt deinceps cor unum et anima una in Christo”
- 35) Grémois, «Qu’avait Cadouin de cistercien au XII<sup>e</sup> siècle?», p. 18, note 41.
- 36) Duval, *op.cit.*, n° 3.
- 37) *Ibid.*, n° 6.
- 38) *Ibid.*, n° 2, 9.
- 39) *Ibid.*, n° 12, 18.
- 40) *Ibid.*, pp.XLVIII-L.
- 41) Barrière, B., *Moines en Limousin. l’aventure cistercienne*, Limoges, 1998, p. 157.
- 42) 拙稿「盗賊騎士の回心と改革派修道院の成立：『レラスのポンスの回心に関する論考とシルヴァネス修道院の始まりの真の物語』試訳」『中央大学文学部紀要史学』63号、59-81頁。
- 43) VGS, §37, p. 263D: “Et cogitavit abbas Thomas, secundum manum Dei bonam secum, augmentare in duobus cultum divinum, scilicet in ampliando Castellariensis templi gentem et locum, et in elevando in sublime a terra Giraudi corpus, ad aedificationem hominum.”
- 44) Andrault-Schmitt, «L’expression architecturale chez les claravalliens de l’Aquisition du Nord: les abbatales des Châtelliers, Boschaud et Valence (1129-1277)», *Le temps long de Clairvaux. Nouvelles recherches, nouvelles perspectives (XII<sup>e</sup>-XXI<sup>e</sup> siècle)*, Paris, 2016, p. 313.
- 45) VGS, §31, p. 263C: “Consueverunt abbates vicini illius regionis in honorem Giraudi annuatim concurrere ad festum sanctae suae depositionis.”
- 46) VGS, §33, p. 263F: “corpus vero in feretro marmoreo in modum arcae fabricato, et super columnas sex lapideas sursum elevato”
- 47) VGS, §36, p. 264C: “positus est Girauo retro altare majus post ciborium ex transverso collocationis venerabilior locus”
- 48) VGS, §33, p. 263E: “vas pro capite, fabricasset, quod et factum est, nam caput

- posuit in vasculo deaurato”
- 49) *Mémoires de la Société des Antiquaires de l'Ouest*, 1842, pl. III.
  - 50) Andrault-Schmitt, «Les églises cisterciennes du Poitou», pp. 77–78.
  - 51) Duval, *op.cit.*, n° 74, 75, 76, 77, 87.
  - 52) VGS, §38, p. 265A: “Est ibi lectus ligneus cum stramine et linteis, in quo, ut dicunt, Giraudus expiravit; quem Deus in medio flammarum sine incendio illaesum conservavit meritis servi sui.”
  - 53) Duval, *op.cit.*, p. XXXVI.
  - 54) この点について本稿の元になった第10回西洋中世学会ポスター報告において舟橋倫子氏からご指摘をいただいた。記して謝意を表したい。
  - 55) *Ibid.*, n° 82.
  - 56) Destefanis, E., «Le monastère face aux laïques au haut Moyen Âge: lieux de culte secondaires et accueil aux limites de l'espace monastique dans le contexte italien», *Bulletin du centre d'études médiévales d'Auxerre*, Hors-série n° 8, 2015 [<http://journals.openedition.org/cem/13599>] (2019年3月21日参照).
  - 57) Duval, *op.cit.*, p. LXXV.
  - 58) Canivez, J.-M., *Statuta capitulorum generalium ordinis cisterciensis*, II, 1254: 31, p. 407: “Petitio abbatis de Castellariis de facienda commemoratione beati Mavuntii et beatae Radegundis in domo sua in conventu, exauditur.”
  - 59) VGS, §35, p. 264C: “Quod potes facito, et de reliquo sollicitudinem abbatiae derelinquito mihi. ego namque pro te ante Deum vigilo, qui locum et gentem protego sub meo azilo.”